

土佐浄瑠璃の脚色法（十七）

―「源平兵者揃」―

鳥居 フミ子

一

「源平兵者揃」には「宝永五戌子初秋上旬」という年号の記載のある木下甚右衛門板の正本がある。⁽¹⁾

宝永五年に書肆木下甚右衛門から一括して出版された土佐浄瑠璃の一つで、初代土佐少掾の正本である。曲中の節事が貞享三年の刊記のある「逸題土佐節段物集」に収められているので、貞享三年以前の語りものであることは確かである。「逸題土佐節段物集」には木下甚右衛門板とうろこかたや孫兵衛板の二種がある。両段物集所収の「源平兵者揃」の節事は次のようである。

① 蓮生坊道行

大伝馬町式丁目 木下甚右衛門開板

② れんしやう高野入

〃

③ れんしやう高野入

大伝馬三町目 うろこかたや新板

右のうち、②③は、板元は違うが同板である。したがって、「源平兵者揃」の貞享三年板段物集所収節事は、「蓮生坊道行」と「れんしやう高野入」ということになる。

土佐少掾の活躍は延宝三年頃より元禄末に至る間である。⁽²⁾貞享三年板の段物集に節事の収められている「源平兵者揃」は土佐少掾の初期の語りものということになる。したがって、この浄瑠璃には土佐節形成期の脚色法をみる事ができるのである。

「源平兵者揃」の正本には前述の「宝永五戊子初秋上旬」の記載のある木下甚右衛門板の他に、同板で年号の記載のないものもあるが、現存正本はすべて木下板で、他の書肆の板はない。内題は「源平兵者揃」で、題簽には「いちの谷八嶋」とあり、板心には「八嶋」と記されている。木下板土佐浄瑠璃正本の表紙裏に貼付されている「六段物板行出来合目録（六段物目録）」には十八番目に「一の谷八嶋」と出ている。この目録に記されているように、一般には「一の谷八嶋」の名称で親しまれた曲のように思われる。

二

「源平兵者揃」は源平合戦に取材したものである。正本の外題「いちの谷八嶋」が示しているように、一の谷の合戦と八嶋の合戦が扱われている。あらずじは次のようである。

第一

義経は平家追討のために一の谷にむかう。弁慶は山の案内者として若者を連れてくる。義経はこの若者を鷲尾三郎経春と名付け、赤皮おどしの鎧兜、一ふりの太刀、鹿毛の馬を与える。

義経は一の谷の上に登り、源氏の馬・平家の馬と称して二疋の馬を追いつろして占う。源氏の馬だけが無事に断崖をかけ下る。これに勢を得て、義経を先頭に三千余騎が一の谷に下り、平家の館に火をかける。平家はあわてふた

めいて八嶋に落ちていく。

第二

清盛の弟経盛の末子敦盛は、平家一門に遅れてただ一人、汀を落ちて行く。

武蔵国の住人熊谷次郎直実は敦盛をみつめて呼び止める。敦盛はひき返し、直実と取り組む。直実は相手の兜をちぎって首を打とうとして若々しい高貴な顔を見、心を打たれてその名を尋ねる。若者は組み敷かれて名乗ることを恥じつつ、経盛の子、無官太夫敦盛と答える。直実は、敦盛が我が子小次郎と同年の十六歳と聞き、いっそう不憫に思つて敦盛を助けようと決心し、馬に乗せて半町ほど行く。山の上の源氏の勢がこれを見て直実の変心を責めためるので、直実は敦盛の命はこれまでと観念し、敦盛の首を打ち落とす。

平家の侍、越中前司盛俊は平家方を落とそうとして一人奮戦し、猪俣小平六則綱と取り組み、まさに首をかこうとしたが、小平六の巧言にだまされて命を助け、小平六と並んで深田のふちに腰を掛けて休む。その時、盛俊は小平六に深田へ突き落とされて殺されてしまう。

第三

熊谷次郎直実は敦盛を討ったことで世の無常を感じて出家を志し、敦盛の首を獄門から盗み取って骨にし、黒谷の法然上人のもとへ行って剃髪し、蓮生坊と名乗る。蓮生坊は敦盛の骨を納めようと、高野山へむかう（「蓮生坊道行」）。「れんしやう高野入」。

第四

義経は平家を八嶋に攻める。

平宗盛は教経に、陸へ上って一合戦するよう命じる。

教経は船端に立ち上って名乗る。これを受けて義経は進み出て名乗り、海中へ駒を進めようとするが、教経の強弓を気づかう家臣に止められる。

教経が義経にむかって矢を放とうとすると義経の股肱の臣佐藤次信が現れる。教経は、一旦は矢を射ることをやめようとしたが菊王丸にすすめられて矢を放つ。義経をかばった次信は胸板を射通されて馬から落ちる。菊王丸は次信の首を落とそうとして船から飛んで下りる。忠信は兄の敵とばかりに菊王丸にかかる。教経は菊王丸を船の中へ投げ入れ、沖へ漕いでその場を逃れる。

源平の軍は入り乱れて戦うが勝負がつかず、相引きに退く。武蔵坊弁慶は長刀を水車に廻しながら大声をあげてかけ出し、手むかう者をなぎたおし、残った者を追い散らして味方の陣へ引く。

第五

忠信は義経の命を受け、兄次信の行衛を探しに出る。

次信は浜辺で下人の男に看病されている。忠信は息も絶え絶えの次信を戸板に乗せて義経の御前に伴う。

義経は瀕死の次信の頭を膝にのせ、懇ろにいたわる。次信は弟忠信に励まされ、両親や妻子への形身の品を依頼し、別れをつけて落命する。

義経は次信が日頃望んでいた名馬太夫黒を自らひき廻して次信に与える。太夫黒は北風にいないで、次信に殉ずる。

第六

壇の浦赤間関で源平の合戦となる。

梶原平三景時は義経の前に進み出て戦の先陣を願う。義経は、大將軍は頼朝で、軍奉行の自分は景時と同輩だと

言って断る。これを不満に思った景時は「義経は侍の主には成り難し」とつぶやく。これを聞いた義経は、以前からの鬱憤も重なって、景時を討ち捨てようとする。三浦のすけよしすみ、土肥次郎実平が大事の前に同土軍をしてはならないと止めるので、義経は思い留まる。平家方はつぎつぎに源氏に降参し、二位の尼は主上を抱いて入水し、女院・宗盛父子は生け捕られ、源氏繁昌の世となる。

栄華を誇った平家が源氏の新興勢力に攻め滅ぼされていく源平合戦は、幾多の劇的な局面をかかえこんでいた。栄枯盛衰の条理をまのあたりにみせた武将たちの姿は、世人の讃仰と哀惜の情をあつめながら語りつがれ、『平家物語』『源平盛衰記』『義経記』などの軍記物語に定着し、幸若舞や謡曲の題材ともなった。江戸時代をむかえると、これらの源平合戦を扱った文芸作品は、新しい文学や芸能に多くの題材を提供することになる。とりわけ、元禄期にむけて成長発展していた古浄瑠璃にとっては源平の合戦は好箇の題材であった。「源平兵者揃」もそのようにして形成された浄瑠璃の一つである。

三

「源平兵者揃」の内容を、先行作品との関係に注目しながら、各段ごとに検討してみる。

一だんめ冒頭の、義経が一の谷の案内者を弁慶に探させて鷲尾三郎経春を得るところは『源平盛衰記』阿卷第三十六「鷲尾一谷案内者事」に拠っている。

『源平盛衰記』では、弁慶が谷底の萱屋に老翁嫗と暮らす若者を探し当てる経緯が詳しく述べられている。「源平兵

者揃」では、この、山奥に英傑を捜し出すという説明的な文章は省略し、ただ次のように述べるに留めている。

むさしぼうべんけい。いづくよりかは召ぐしけん。十六七のわつは一人。此山のおん内しやとて。御まへに召出す。

また、若者を鷲尾三郎経春と命名するところも、『源平盛衰記』では、義経はまず若者にむかつて

親には嫡子か末子か

と聞き、若者が三番めの子と分かって三郎とよび、さらに、鷲尾を姓として与えるいわれを丁寧の説明し、主君と父の名から一字づつとって経春という名前にするようにと語る。「源平兵者揃」では、これを極めて簡略にし、

在所は。何といへる所ぞ。さん候、山のはなさし出。わしのかほににたればとて。わしの尾と名付て候。大将聞し召。然らば。なんぢが名をば、けふよりして。鷲尾ノ三郎。名のりはよしつねのつねを給はり。経春とつけ給ひ。

としている。このような言い方だけでは何故に三郎というかは不明であり、経春と名付ける理由についての説明も不十分である。『源平盛衰記』の詞章を簡略化して使用したためにこのような不完全な説明となったものと解される。

二だんめ・三だんめは、熊谷次郎直実が敦盛の首を討ち、世の無常を感じて出家する件を扱った段である。この箇所詞章は舞曲「敦盛」が流用されている。

まず、二だんめの前半、直実が敦盛の首を討とうとして高貴な様子に胸を打たれ、命を助けようとする場面を比較してみよう。

あつもり。くまがへと聞し召。のがれがたくやおぼしけん。こま引かへし。よれくまん、尤とて。おしならべ引くんで。両馬があいにどうとおち。甲ちぎつてからりとすて。御首かゝんとしたりしか、あまり手よはく思ひつゝ。うちかぶとを見てあれば。いまだ十五六の若上らう。うすけしやうに、かねくろく。ゆふにたへなる御すがた。さしもにかうなるなをさねも。いつしか心かわりけん。あまり御いたわしく思ひ。今はたすけ申べし。なのらせ給へと申ける。
(土佐浄瑠璃「源平兵者揃」)

あらいたはしやあつもり。熊谷と聞しめされ。のがれがたくおぼしめしけれども。(中略)たがいにせうふ見えされは。よれくまむ尤とて。たがいに打物からりと捨。よろひの袖をひつちかへ。むずとくむて二人が。両馬のあひにどうとおつる。あらいたはしやあつもり。心はたけくいさませ給へとも。老むしやの熊谷にて物のかずともせざりけり。やすくと取ておさへ。かぶとちぎつてからりとすて。腰のかたなひむぬいてくびをとらむとしたりしが。余に手よはくおもひ申。さしうつついてさうがうを見たてまつれば。うすけしやうにかねくろく。まゆふとうはかせ。さもやごとなきてむしやう人の。年例ならば十四五と見えさせ給ひたり。くまがへ余のいたはしさに。すこしくつろげ申。さも候へ上らふは。平家がたにおひてはいかなる人のきむだちにて御座候ぞ。御名字を御なのり候へ。
(大頭左兵衛本「敦盛」³)

この対比で明らかなように、土佐浄瑠璃「源平兵者揃」の詞章は幸若舞の詞章を省略の手法によって採用している。しかし、敦盛の年齢を、幸若舞では十四、五とするのに対して、土佐浄瑠璃では十五、六としているのを見ると、大

頭左兵衛本「敦盛」の詞章が直接の原拠となっているのではないようにも思われる。あるいは、敦盛を十五、六とするような幸若舞の詞章があったのであろうか。

この場面で、一旦直実と敦盛の話は中断し、あらたに、平家の武将盛俊の討死の話にうつっている。すなわち、平家の侍越中前司盛俊が小平六をとり押さえ、まさに小平六を討とうとしながら小平六の巧言にだまされ、逆に小平六に殺されてしまう場面が展開することになっている。この場面は幸若舞「敦盛」には扱われていない。『源平盛衰記』の佐卷第三十七「則綱討盛俊事」に細叙されている場面である。本曲ではこれを簡略化して直実と敦盛の話につづけたのである。

三だんめの、直実が世の無常を感じて武士を捨て、黒谷の法然上人のもとで出家するに至る詞章は、幸若舞「敦盛」とほとんど同じである。盛俊討死の件を挿入して後、ここでふたたび幸若舞「敦盛」に拠る詞章がつづくことになっている。土佐浄瑠璃「源平兵者揃」と幸若舞「敦盛」の詞章を対比してみる。

其後。くまかへの次郎なをさねは。あつもりをうちしより。うき世のむじやうをくわんずるに。草葉における白露。水にやどれる月よりも。なをもあだなるうき身ぞかし。きんこくに。花を詠ぜしゑいぐわも。無常の風にさそわるゝ。人間五十年。げでんの内をくらふれば。夢まぼろしのごとく也。一たび生をうけ。めつせぬものゝあ

おもへは此世はつねのすみかにあらず。くさはにをく白露。水にやとる。月よりなをあやし。きむごくに花を詠じ。栄花はさきたつてむしやうのかせにさそはるゝ。なむろうの月を、もてあそふともからも。月に先たつてうるの雲にかくれり。人間五十年けてむの内をくらふれば夢まぼろしのごとくなり。一度生をうけめつせぬ者のあ

るべきか。是をぼだひのたねとして。世をのがれんと思ひ。ひそかにぢん中をしのび出。都をさしてぞのほりける。あつもりの御首を。ごくもんより盗みとり。むじやうのけふりとなし申。御こつをひろひ首にかけ。東山。黒谷へ立こへ。法然上人を。師匠とたのみ。かみをそり、其名を引かへ、れんしやうぼうとぞ申ける。

(土佐浄瑠璃「源平兵者揃」)

るへきか。これをほたいのたねとおもひさためさらんはくちおしかりし次第そと。おもひさため。いそき都に上りつゝ。あつもりの御くひを。見れば物うさに極門よりもぬすみとり。我かやとにかへり。御僧をくやうじ。無常のけふりとなし申。御こつをとりくひにかけ。昨日までもけふまでも。人によはけを見えしとちからをそへし白ま弓今は何にかせむとて。みつに切折三本の。そとばとさため。浄土の橋に渡し。宿を出てひかし山。黒谷に住給ふ。法然上人を師匠とたのみたてまつり。もといきり西へなげ。其名をひきかへれむしやう坊と申。

(大頭左兵衛本「敦盛」)

このような詞章の類似をみると、「源平兵者揃」のこの場面は、幸若舞「敦盛」の詞章を流用したものと言ってもよいように思われる。

熊谷直実が敦盛の遺骨を抱いて高野山へむかう場面は、節事「蓮生坊道行」「れんしやう高野入」として、土佐浄瑠璃段物集に収められ、広く愛唱されたのであった。貞享三年板「逸題土佐節段物集」に収められていることからみても、土佐少掾の活躍のはじめの頃から土佐節の代表的な節事として流布していたと考えられる。

段物集所収の「蓮生坊道行」は、蓮生坊が黒谷を出て高野山に到着するまでの道行であるが、「源平兵者揃」の本文

からきりとられた詞章の範囲には長短がある。「源平兵者揃」の三だんめの冒頭から高野山到着までをとっているもの(①)、直実が出家の志を抱いて黒谷の法然上人を訪ねるところから高野山到着までをとっているもの(②)、京から高野山への道行だけをとっているもの(③)の三種である。いずれも、高野山に着いた所で終わっている点は共通しているが、出だしが相違しているので長い短いの違いができてくる。これらがまた節付けを異にしているので、「蓮生坊道行」は単独な節事としてはいろいろに語られたと想像される。次に三種の本文の様子を示し、所収の代表的な段物集をあげてみよう(節付けは省略する)。

①へ其後。くまがへの次郎なをさねは。あつもりを打しより。うき世の無常を観するに。……行ばほどなく高野山。こんがう。ぶじにそつきにける

a	浄瑠璃和家竹	大伝馬貳丁目	木下甚右衛門板
b	色竹蘭曲集	大伝馬貳丁目	木下甚右衛門板
C	蘭曲文音竹 <small>あやね</small>	小伝馬三丁目	木下甚右衛門板
D	色竹	通塩町東横町	松屋喜兵衛板
E	色竹	江戸通油町	村田屋次郎兵衛板
F	抜本「蓮生道行」	通油町	藤田板

②へ其後くまがへの二郎なをさねは。ひがし山黒谷へうちこへ。ほうねんしやうにんをししやうとたのみかみをそり。……行はほとなくかうや山。こんがうぶじにぞ着にける

G 逸題土佐節段物集

木下甚右衛門板

H 土佐節道行集

武州府下

本問屋板

I 色竹

木下甚右衛門板

J 蓮生坊道行

武州府下

本問屋板

K 飯題
けいこ上るり

③ へしゆうしやうなれ。ひがしを見れば。しきしまや、うたの中山。せいがんじ。……行はほどなくかうや山、

こんがう。ぶじにぞつきにける

L 蘭曲色竹(大竹集一)

木下甚右衛門板

M 蘭曲後撰集

小伝馬町三丁目

木下甚右衛門板

N 蘭曲文音大林集

小伝馬町三丁目

木下甚右衛門板⁽⁴⁾

①の詞章には「人間五十年。げでんの内をくらぶれば。夢まほろしのことく也。一たび生をうけ。滅せぬものゝ有べきか。是をぼだひのたねとして。世をのがれんと思ひ」という詞章が含まれている。これが多くの段物集に収められ、抜本にもなって流布していることは注目すべきであろう。これについては後述することにする。

黒谷から高野山までの道行の本文は、幸若舞「敦盛」の詞章によりながら、道中の有様をよりいっそう細かく敘述している。道行の最初の部分を比較してみよう。

○上人に御暇を申。くろだにをまた夜を籠て立出。都出の名所に。ひがしをながむれば。せいがむじ今くまの。清水やさかちやうらくし。かの清水と申は。さがていの御願所。すみとものざうりう。田村丸の御こむりう

大頭左兵衛本「敦盛」

○上人にいとまをこひ。新くろ谷を立出る、心の中こそ^{三重}しゆしやうなれ^{ハル引上} ヲロシ^入ひかしを見れば^下。敷嶋や、^引
哥の中山。せいがんじ^人。鳥部野に、たつ夕けふりよそのあはれも。今ははや。我身のうへとおもわれて、心ほそ^{下ムスヒ}
さは限りなし、とてもかくてもあだし身を。思ひ。すつれはさしもげに。うき世のやみもはれて行て。心もきよ^{イロナゲ}
きせいすいし。田村丸の御こんりう。^{イロ詞}

土佐浄瑠璃「源平兵者揃」

幸若舞では清願寺・今熊野・清水・八坂・長樂寺と地名が並べられ、そのあとで、あらためて清水寺をとり上げて縁起を述べている。都の名所をつぎつぎに並べて説明していくという形式である。

これに対して土佐節では、黒谷を出て高野山にむかう蓮生坊の目にうつる風景として、蓮生坊の心中を説明しながら道中の様子を描いている。鳥辺野にたつ夕煙は、世の無常を痛感した蓮生坊にとっては、「我が身のうへとおもわれ」るのである。観客は蓮生坊の心になって、蓮生坊と共に道行するという形である。

さらに、土佐節「蓮生坊道行」の詞章は、七五調を基にしてまとめられている点も注目すべきである。幸若舞の蓮生の道行も、イロ・フシなどの節付があることによって音調を整えるための工夫がなされていることが察せられるが、土佐節ではよりいっそう音楽性が重視されているのである。

「蓮生坊道行」の詞章の多様性は、その記譜状況の不一致と相俟って土佐節の不安定性を示すものとも解されるが、この道行がいかに人々に愛好され、語りつがれていたかを示すものでもある。⁽⁵⁾

なお、前にも述べたように、三だんめのはじめから採られている抜本には「人間五十年。げでんの内をくらぶれば。

夢まほろしのことく也。一たび生をうけ。滅せぬものゝ有べきか。」という詞章が入っている。抜本の「蓮生坊道行」によって親しまれたこの言葉が、後の熊谷ものを生み出す母体となったと考えられる。

「れんしやう高野入」は、蓮生坊が高野山に到着したところで、高野山の堂塔・諸仏像などを説明している。詞章は幸若舞「敦盛」の詞章とは異っている。先行作によらず、「源平兵者揃」の節事として独自の詞章が工夫されたものと思われる。

四だんめ・五だんめは、八嶋合戦において佐藤次信が義経を護って討死し、義経に手厚く葬られる場面である。この箇所の詞章は、幸若舞「八嶋軍」が流用されている。

幸若舞「八嶋軍」は、平家追討の後、頼朝に追われて奥州に落ちのびた義経主従が佐藤莊司の館に立ち寄り、母尼公に次信の最期を語るといふ設定になっている。浄瑠璃「源平兵者揃」では、このような「八嶋軍」の過去回想形式をとり払って、次信の最期を現実に眼の前に進行していく現在進行形の場面として展開させたのである。二だんめ・三だんめで扱われた熊谷直実と敦盛の話には直結しないが、一だんめの、一の谷の合戦場面に続いて、八嶋の戦いへと源平の合戦は進行してきたことになっている。

幸若舞「八嶋軍」において、弁慶によって語られた佐藤次信の最期の模様は、「源平兵者揃」では、前半が四だんめに、後半が五だんめに分けられている。すなわち、四だんめは、次信が義経を護って、能登守教経の強弓を胸に受ける場面、五だんめは、瀕死の次信が弟忠信によって義経の御前に運ばれ、義経にいたわられつつ落命し、名馬太夫黒を賜わる場面である。この、四だんめ・五だんめに展開する次信最期の場面は源平合戦の中でも極めて劇的な場面である。しかも源平合戦中の感動的な一齣としての完結性も持っている。

四だんめ・五だんめに扱われたこの次信最期の場面は、そのままの形で、後の土佐浄瑠璃「のぼり八嶋」へ移行することになる。⁽⁶⁾「のぼり八嶋」は貞享末より元禄初年頃のものと考えられる浄瑠璃である。その三だんめ・四だんめに、「源平兵者揃」の詞章とほとんど同詞章でこの場面が挿入されているのである。

「のぼり八嶋」には義経の旗上げから始まって頼朝・義経対面、義経勝浦上陸、次信最期、義経・梶原先陣争を経て、平家討滅、義経帰洛までが扱われている。八嶋の戦いでの次信の最期は、義経の平家討伐の戦いの中での中心場面で、何度もくり返して上演されたと考えられる。

『松平大和守日記』延宝六年正月六日の条に、土佐少掾によって「八嶋」が上演された旨が記されている。この時の上演は五段とあるが、その内容については不明である。おそらく幸若舞「八嶋軍」の詞章が流用されていたのである。その中の次信最期の場面が「源平兵者揃」の四だんめ・五だんめにとり込まれ、さらに、「のぼり八嶋」の三だんめ・四だんめにも入れられることになったのであろう。

「源平兵者揃」四だんめの段末には、次信の最期というテーマとは異質の場面が付加されている。それは、弁慶が長刀を振り廻しながら平氏の軍の中へ駆け込み、つぎつぎと平家方を斬り倒す場面である。四だんめから五だんめにかけて次信最期の話がつづいているので、この四だんめ末尾の弁慶の活躍は異質の話が挿入された形になっている。

しかし、一見唐突に感じられるこの弁慶活躍の場面も幸若舞「八嶋軍」の叙述に従ったものである。「八嶋軍」では次信に矢が命中したあと、しばらく合戦の様子が描写される。次信に矢を射た教経は菊王丸を海中から船にひき上げて漕ぎ去っていく。平家の軍兵の中から悪七兵衛景清が進み出て源氏方と戦うがなかなか勝負がつかず、双方疲れ果て、源平両軍は相引きに退く。この様子を見た弁慶が長刀を振り廻しながら駆け出て一働きすることになる。「八嶋

軍」に展開するこのような源平合戦の詳細な叙述を、「源平兵者揃」では大半は省略して弁慶の活躍のみを採用したのである。そのために、弁慶が駆け出すという場面が前後の脈絡を失って唐突となったのである。

このような挿話が残されたことにより、「源平兵者揃」の構成は散漫になっているといわざるを得ない。「源平兵者揃」の作者には四だんめ・五だんめを、次信の最期という劇的局面によってまとめようという意図はなかったものと解される。幸若舞「八嶋軍」の詞章を安易な態度で借用するという根本的な態度が、「源平兵者揃」をこのような緊密さを欠いた散漫な展開に終らせたのであろう。当然のことながら、「源平兵者揃」の四だんめ・五だんめの詞章を流用した「のぼり八嶋」三だんめ・四だんめには、この弁慶の活躍をみせる挿入場面は省略され、一つづきの次信最期の物語としてまとめられている。この扱い方に、両作の脚色態度の相違を認めることができる。

六だんめは、壇の浦の合戦の時、梶原平三景時が義経に先陣を願ひ出るが許されず、それをうらみに思つて雑言をつぶやき、これを耳にした義経が怒つて景時を討とうとして家臣に押し留められるという場面である。この場面は『源平盛衰記』にはないが、長門本『平家物語』には細叙されており、詞章も類似している。両者を対比してみよう。

かゝる所へ。梶原平三かげとき。はうぐわんの。御前に
すゝみ出。けふのいくさの先ぢんを。此景時に。たび候
へとぞ申ける。判官聞し召。よしつねがなくはこそとぞ
仰ける。かぢはら承り。まさなふ候。とのはずでに。大
將軍よと申。判官かさねて。それは思ひもよらず。鎌倉

梶原、判官に申けるは、今日の先陣は侍どもにたび候へ、
判官のたまひけるは、義経がなくばこそとありければ、
梶原いかにまさなく君は大将にてまし／＼候へといへ
ば、判官、鎌倉殿こそ大将よ、よしつねは御代官として
奉行をこそうけたまはれ、和殿原も義経も唯同じ事ぞ、

殿こそ大將軍にておわしませ。此よしつねは。いくさ奉
行を承つて。わとのばらとおなじ事よとのたまへば。梶
原先陣を所望しかね。てんせい此との。侍のしうには。
成がたしとぞつぶやきける。判官氣しよく替つて。やあ
おのれは日本一のおこのものかな。いぜんわたなべに
て。うしなわんと思ひしに。人々せいし給ふゆへ。命を
たすけおく所に。またもやすいさん申事。もつてのほか
のきつくわいなり。すは八まんも御じけんあれ。ゆるさ
じものをとのたまひて、すでにあやうく見えければ。東
国の諸大名。判官どのを取とむ。かぢはら平三かげ時
も。こはいかにおよびもなし。かまくらどのより。べつ
にしうはもたずとて。とある所にひかへたり。

(土佐浄瑠璃「源平兵者揃」)

右の対比をみるに、両者共通の表現もあって、浄瑠璃「源平兵者揃」は長門本『平家物語』の詞章と密接な関係があるように思われる。「源平兵者揃」では、長門本『平家物語』よりも、義経の景時に対する怒りを強調している。義経は景時に対して「いぜんわたなべにて失わんと思ひしに」、家臣に留められ、今またこのような雑言を吐くとは「もつてのほかのきつくわいなり」と激怒している。義経は家臣にひきとめられて景時を討ち殺すことを思い留まるが、

(中略)

梶原先陣を望かねて、此殿は侍のしうにはなりとげじと
ぞつぶやきける、判官は腹をたて、梶原は日本一のを
この者にてありけるはとの給へば、梶原もへりもおか
ず、是はいかに鎌倉殿の外に主はなきものをといふ、判
官馬に打乗て、矢を取て打くはせんとし給ふ、梶原も馬
に打乗て矢取たばさみけり、
(長門本『平家物語』)

そのあとに「源平兵者揃」では次の詞章がつけ加えられている。

それよりもしてかぢはらが。判官殿をにくみそめ。かまくらどのへざんげんし。つるにうしなひ申とは。後にぞおもひしられる

景時が義経に遺恨を持ち、後年になって義経を讒言したということは『平家物語』や『源平盛衰記』では義経と梶原の逆櫓の言い争いの箇所に出ている。そのような筆致を、「源平兵者揃」では壇の浦の先陣の口論にも使ったのであろう。

以上見てきたように、「源平兵者揃」に展開する各段の場面は、幸若舞や軍記物語などの先行文学作品に拠って作られている。これを整理すれば次のようである。

第一	① 鷲尾三郎経春は一の谷の案内者となる	源平盛衰記	
第二	② 熊谷は敦盛を討つ	幸若舞「敦盛」	A
	③ 盛俊は小平太にだまされて殺される	源平盛衰記	
第三	④ 熊谷は出家する	幸若舞「敦盛」	A
	⑤ 蓮生坊道行		A
	れんしやう高野入		
第四	⑥ 次信は教経の強弓に倒れる	幸若舞「八嶋軍」	B
	⑦ 弁慶は平家の陣へ斬り込む	〃	B
第五	⑧ 次信の最期	〃	B
第六	⑨ 景時は義経に先陣を許されぬことを遺恨に思う	平家物語	

これらの場面のうち、筋の展開の上では前半の②④⑤は一続きであり、後半の⑥⑦⑧が一続きである。「源平兵者揃」はこの二つの大きな塊A・Bによって構成されている。この場合に、A・Bは共に幸若舞の詞章が転用されている。本曲は、源平合戦を扱った二つの幸若舞を並べ、その前後と中間に、軍記物語から小場面をきりとりて付加するという手法をとっている。

このようにして「源平兵者揃」は、先行作によって有名になっていた源平合戦の名場面をつぎつぎと走馬燈のように展開してみせている。軍記物語や幸若舞に語られた源平合戦の逸話が、それぞれにおいて劇的な完結性を持っていたために、このような切りつぎの手法による浄瑠璃化を可能にしたのである。

四

「源平兵者揃」は、源氏と平氏の合戦をテーマとし、一の谷の合戦から八嶋の戦いに焦点を合わせ、劇的な場面を連結して一曲としたものである。そこには前後に脈絡のない完結したエピソードがつぎつぎにくり展げられる。源平合戦の一齣一齣が観客の目前を走馬燈のように流れていくのである。

このような「源平兵者揃」の一齣一齣は、幸若舞や戦記物語によって人々に親しまれていた場面である。「源平兵者揃」には幸若舞からは「敦盛」と「八嶋軍」の詞章が転用され、戦記物語からは『源平盛衰記』や長門本『平家物語』の叙述が使われている。そして、幸若舞の詞章はほとんどそのまま使われているのに対して、戦記物語の場合は大幅な省略増補の手が加えられている。語りものとしての浄瑠璃に幸若舞の詞章をほとんど手を加えずにそのまま使うことは容易であった。ところが、戦記物語として文字化されていた『源平盛衰記』や『平家物語』の場合にはその文章には相当の改変が必要とされたのは当然のことであろう。

このように「源平兵者揃」は源平合戦に係る先行作品のエッセンスの寄せ集めと言っても過言ではない脚色がなされているのであるが、その中で浄瑠璃としての特色を節事によって出そうとしている。三だんめの「蓮生坊道行」と「れんしやう高野入」がそれである。幸若舞では簡単に扱われていた場面を特に強調して長文の節事とし、土佐節のきかせ所としたのである。この二つの節事は、正本では連続しているが段物集では別々に扱われている。それぞれの単独の節事として人口に膾炙し、普及したのである。

「蓮生坊道行」は抜本にもなっていて、とくに愛唱されたことがうかがえる。世の無常を痛感した直実が剃髪して蓮生と名乗り、敦盛の遺骨を抱いて高野山にむかう「蓮生坊道行」は、並木宗輔・浅田一鳥らによる浄瑠璃の名作「一谷嫩軍記」の三段め、熊谷陣屋の幕切れに直結していると言えよう。「一谷嫩軍記」では、直実は敦盛の身替りに我が子小次郎の首を討って白無垢の出家姿となり、驚く女房にむかって、

躬せがれ小次郎が抜欠ぬけがけしたる九品蓮台。一つ蓮の縁を結び。今より我名も蓮生と改ん。一念弥陀仏即滅無量罪。十六年(8)
も一昔。ア夢で有たな

と言いながらほろりと涙の露をこぼす。その姿に、御大将をはじめ並みいる人々は思わず涙をさそわれ、深い感動がその場をおおいつくすことになる。

現行の歌舞伎「熊谷陣屋」では、出家姿になった蓮生は、花道で

ア、十六年は一昔ひとむかし、ア、夢だく。(9)

と、一しずくの涙をふり払って黒谷の法然上人のもとへと旅立っていく。この感動的な「一谷嫩軍記」の蓮生の姿は、土佐浄瑠璃「源平兵者揃」の「蓮生坊道行」によって定着していた蓮生坊の姿の再生であったのである。

注

(1) 拙編『土佐浄瑠璃正本集』第一(角川書店 昭和四十七年)所収。本文の引用は同書による。ただし、不用と思われる節付は略した。

(2) 拙著『近世芸能の研究―土佐浄瑠璃の世界―』(武蔵野書院 平成元年)参照。

(3) 笹野堅『幸若舞曲集』(第一書房 昭和十八年)所収の本文による。本稿中の幸若舞の詞章は同書による。

(4) 引用本文は、それぞれ最初にあげた段物集による。詞章の表記には次のような異同がある。①のうち、aとEは同じ、Fは用字と。印の位置が異なる。②のうち、HとKは同じ、Gは「ほどなく」とある。③はLとNすべて同じ。段物集の所在を示せば次のようである。

① a 浄瑠璃和家竹

架蔵

H 土佐節道行集

架蔵

b 色竹蘭曲集

天理図書館

I 色竹

架蔵

C 蘭曲文音竹

架蔵

J 蓮生坊道行

守随憲治氏旧蔵

D 色竹

東京女子大学附属図書館

K 板題
けいこ上るり

守随憲治氏旧蔵

E 色竹

国立台湾大学図書館

③ L 蘭曲色竹(大竹集二)

天理図書館

F 抜本「蓮生道行」
貞享三年

天理図書館

M 蘭曲後撰集

架蔵

② G 逸題土佐節段物集

辻町文庫・横山 正

N 蘭曲文音大林集

架蔵

(5) 横山正「土佐少掾の曲節」(『語文研究』第十六号 昭和三十八年六月)

(6) 拙稿「土佐少掾正本『のぼり八嶋』とその特色」(『井浦芳信博士
華甲記念論文集 芸能と文学』笠間書房 昭和五十二年)

(7) 『平家物語』(国書刊行会 明治三十九年)

(8) 宝暦元年(一七五一)十二月初演。本文は『文楽浄瑠璃集』(日本古典文学大系 岩波書店 昭和四十年)による。ただし、

不用と思われる振り仮名は省略した。

(9) 小池章太郎編『一谷嫩軍記』(白水社 一九八五年)による。

近江源氏先陣館
繪本太功記
梶原平三誓石切